

言語行動と構成要素の流れ

平 澤 洋 一

1 作品と言語行動

一般的な言語行動の構造を説明しやすくするため、図1のような言語行動モデルを仮定し、言語行動と身体表現の問題を考えてみたい。図1は「日常会話」「文学作品」「語り物」など、人間のすべての言語行動を総括的に表示した便宜的なモデルであり、いくつかの要素が選択されて具体的言語行動が実現されるものとする。モデルの中の「言語要素」は「伝達表現」と「内語表現」から成り、心の中で「ありがとうございます」と言いながらお辞儀だけするような「あいさつ行動」での言語要素は、「内語表現」のみで構成され、ゼロ言語による伝達表現となる。これを「内語1」表現とする。したがって、後出する作品『ひと声』の中のS6の文「……。」は内語1の言語行動として扱うことにした。改行書きにされた会話のやりとりでの「……。」は、単に語彙表示がなされていないだけのゼロ言語伝達表現行動として「会話」を形成していると思われるからである。これに対し、「地の文」にあらわれる「内語表現」では、登場人物の「内語」がゼロ言語ではなくて必ず文字・語彙で表面化され作者によって説明され代弁されるような感じで間接的に表現されるという面を重くみて、「内語2」とした。

図1は、言語行動は言語主体（作者、語り手、話し手あるいは登場人物）が常に「共同体」の人々に一致することは限らないので、「共同体」は「言語行動の場」に内包されるものとして扱った。作品によっては「共同体」の領域が広がって作者や作品を包み込んでしまう⁽¹⁾こともある。例えば、志賀直哉の作品のように登場人物と共同体の人物とが一致しない作品においては「共同体」は図1の位置で点線として表示され、深沢七郎『樽山節考』のオリンのように両者が一致する登場人物の場合の「共同体」は、本格的な議論は将来に譲るとして、図2のように登場人物や言語行動の領域を包む形で存在するとしておきたい。

図2は、作品内言語行動、つまり登場人物による直接言語表現行動あるいは地の文による間接言語表現行動⁽²⁾の要素を仮定した図である。「作者」は「他の文」および「内語2」とは間接的な関係で顔を出してくる。また、「語り物」においては「語り手」「聞き手」が実線で示される直接的な関係に変わる。

言語行動モデル

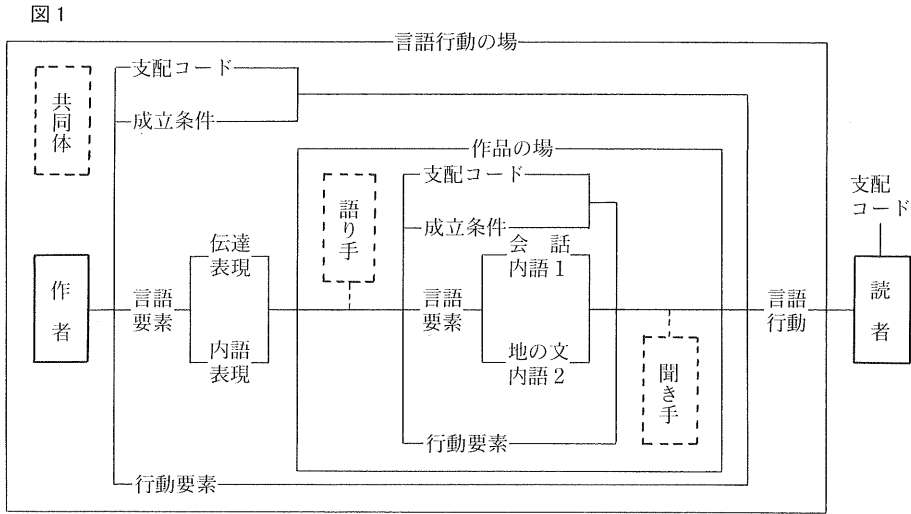
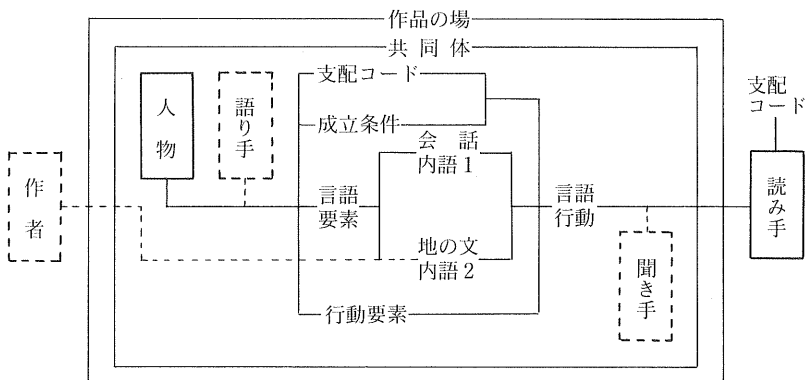


図2 作品内言語行動モデル



2 言語行動要素

言語行動要素については、すでに論述したことがある⁽³⁾が、本稿では後出の調査結果を踏まえてかなり補完した。コミュニケーションのレベルを統御する要素としての「支配コード」を加えたのも、その一つである。

人と概念・ものとの関係を統御する要素としての言語要素をコミュニケーション要素、人々との関わりを統御する要素としての行動要素をメタ・コミュニケーション要素とすることも考えられるが、(ア)人と概念・ものとの関わりは言語要素に限定されず支配コードや成立条件とも関係してくる、(イ)支配コード、成立条件、言語要素および行動要素が互いに同レベルで緊密に連関しているのではないかとと思われるところから、本稿ではこれら4要素をコミュニケーション要素として並列に扱う立場をとった。

それらは具体的には下記のような下位項目群で構成され、必要に応じて下位項目群から項目が選択される。支配コードでは、当該言語行動において特に強く働くコードが支配コードとなり、支配コード以外は非関与的な従属コードとなる（例えば葬儀における礼服の美的・日常的コード）。

1 支配コード＝コミュニケーションのレベルを統御する要素

- (1) 文化コード→2-(19), (20)などに関連
- (2) 地域コード
- (3) 歴史コード→3-(4)A(10)などに関連
- (4) 儀礼コード
- (5) 日常コード
- (6) 論理コード
- (7) 情感コード
- (8) 美的コード
- (9) その他のコード

2 成立条件＝コミュニケーションの条件を統御する要素⁽¹⁾

構成要素＋条件（条件はA, B, C……で示す）から成る

- (1) 時＝A特定時／非特定時, B朝／昼／夜分に, C約束の時間より遅く……
- (2) 所＝A駅で, B自宅で, C路上で……
- (3) 言語行動の主体＝A男／女, B老／若, C地位が高い／低い, D家族／他人, E関係者／部外者, F意志の強い男／弱い男……
- (4) 言語行動の相手＝A男／女, B老／若, C親／疎, D目上／目下, E尊敬できる／できない, F地位が上／下, G関係者／部外者, H命令できる相手／できない相手……
- (5) 言語行動の動機・目的・意図＝A言語行動が意図的／非意図的, B用ができた, C感謝したい, D忠告しなければならない, E伝言を頼みたい, F確認しておきたい……
- (6) 言語行動の素材・話題＝A事件, B発見, C旅行, D休暇……
- (7) 言語行動のジャンル＝A小説, B戯曲, C講談, D実用文, E日常会話……
- (8) 言語行動の機能＝A疑問, B念押し, C感謝, D命令……
- (9) 伝達内容＝A静かに聞いてほしい, B品物をすぐ送ってほしい, C帰ったら電話をくれるよう伝言してもらいたい, D名前は何というのか, Eできるだけ早くこっちへ来い, F重要な話だ……
- (10) 伝達規制＝A特定時／非特定時, B緊急／普通, C正式／略式, D繰り返す／1回のみ……
- (11) 言語規範＝A標準語／非標準語, B会話直前／会話時, C共通語／非共通語, D方言／

非方言, E 仲間ことば／非仲間ことば, F 規範性が高い／規範性が低い……

- (12) 言語表現の調子＝A 格調高く, B 厳かに, C 改まって, D くだけて, E 声をひそめて, F ささやくように……
- (13) 心理場面＝A 神聖, B 改まり, C 興奮, D 沈痛……
- (14) 接触状況＝A とても近づいて, B 手をとって, C 握手して, D 肩に触って……
- (15) 媒体＝A 電話, B 電報, C ファックス, D 手紙……
- (16) 言語行動の結果・効果＝A 相手が喜んでくれる, B 相手に迷惑をかけることになってしまう, C 相手が判断に迷ってしまう……
- (17) 言語主体の評価＝A すばらしい相手だ, B かなりすばらしい相手だ, C とてもすばらしい相手だ, D 最もすばらしい相手だ, E 尊敬できる相手だ, F 好きになれそう……
- (18) 言語主体の判断＝A しゃしゃりでることは不躰けである, B この相手には正式な文書でない失礼だ, C 本来なら直接会って頼まなければならないのだが, この人なら分かってくれる……
- (19) 言語習慣＝A 虹を7色で表現／6色で表現, B 「こ・そ・あ」を3区分で表現する／2区分で表現する……
- (20) 社会規制＝A 彼岸花は屋敷に植えてはならない, B 新学期は9月から始まる……

3 言語要素＝人と概念・ものとの関係を統御する要素

- (1) 音韻要素＝A 具体音声, B 音素, C 拍構造, D 音節構造, E 融合, F 脱落, F イントネーション, G プロミネンスなど
- (2) 文法要素＝A 連接の手, B 形態素, C 語・品詞, D 構文構造, E テンス, F ムード, G アスペクトなど
- (3) 語彙要素＝A 語種, B 語彙素, C 意味特徴, D 語彙体系, E 意味変化, F 位相(男女差, 年齢差, 地域差……) など
- (4) 文体要素(文体とは, 作品の場における言語行動の軌跡が類型化されたもの。文体要素を機械的・網羅的に並べたものが文体の総体になるわけではない)

A 基層的文体素＝社会的文体ほか

1. 作者・筆者の自我のありよう, 認識
2. ジャンル: 小説, 詩, 短歌, 俳句, 論説文, 説明文……→A 6. や A 10. と関連
3. モチーフ: テーマを描く角度(時, 所, 人)
4. 物語性: ストーリー性をもつか
5. 多話性: ミニマル・ストーリーの数が多いか→序破急, 起承転結, 四部五段→A 8, B 2-6 などと関連
6. 直叙性: 真実をどの程度客観的に叙述しているか(虚構, 誇張, 伝聞などの程度はど

うか)→作品全体に対する作者のモーダル(である,と思う,にちがいない,かもしれない,らしい……)に現れる。

7. 説得性：読み手を積極的に説得しようとする意図をもつか(一般に論説文では関与的だが説明文や小説では非関与的)
8. 視座→B 2 と関連
 - 8-1 外界・共同体などに対する作者・表現主体の関係の仕方
 - 8-2 作品・言語表現に対する作者・表現主体の関係の仕方(共同体,話者,語り手,作中人物,地の文と作者・表現主体の目が一致しているか)
 - 8-3 作中人物同士の関係の仕方
9. 視点移動性：視点移動ほどの程度か→B1. と関連
10. 言語規範(社会的文体)→B5., B6. と関連
 - 10-1 時代的規範：古代の文体,中古の文体……
 - 10-2 文章類型的規範：和漢混淆文,口語文,仮名文……
 - 10-3 作品類型的規範：小説文,記事文,脚本……

B 表現的文体素＝個人別文体, 作品別文体

1. 構成

- 1-1 登場人物などの時間的構成→2-4と関連
- 1-2 登場人物などの空間的構成

2. 描写・叙述の性格

- 2-1 論理的か感情的か：〈1〉名詞率(名詞数/総文節数),〈2〉修辞＝a直喩数,b声喩数,〈3〉語彙＝a色彩語数,b感情語数
- 2-2 作者の目の現れ：〈1〉語り手による文の比率,〈2〉登場人物を外から描写した文の比率,〈3〉登場人物の目を通して見た文の比率,〈4〉登場人物の心情を述べる文の比率
- 2-3 サマリー(背景説明など)率：サマリー行数/総行数
- 2-4 時制：〈1〉完了形態(き,けり,ぬ,たり,り),〈2〉過去止めの文の比率(さきやき体,断叙体などとも関連)

2-5 言語主体の判断

2-6 人格語(人を表すことば)の特色

3. 描写・叙述の速度

- 3-1 句点率(句点数/総字数,句点数/段落数)
- 3-2 読点率
- 3-3 会話文の比率(会話行数/総行数)→4-2と関連

3-4 動詞文の比率

3-5 場面展開数

4. 文体の純粋度

4-1 引用文の比率：引用行数／総行数

4-2 会話文の性格：〈1〉直接話法，〈2〉間接話法

5. 表記

5-1 漢字率

5-2 文末表記⁵⁾：〈1〉だ・た体（二葉亭四迷・志賀直哉など。語り手は自らと対話→語り手は登場人物の中に姿を消す。言文一致体により作者の内面がささやくように出現する。表現主体は作中人物に内在し、「た」は今ここを表す。自我はきわめて孤立的である），〈2〉である体（尾崎紅葉など），〈3〉のである体（島崎藤村，深沢七郎など。島崎藤村ではきわめて孤独の響きがあるが，深沢七郎では孤立的ではない。作者の自我のありよう，外界認識が違うからである），〈4〉です体（山田美妙など。聞き手を意識した文体→語り手が顕在化する）→5-3と関連

5-3 語彙表記：和文体，漢文訓読体，和漢混濁文，擬古文，侯文，明治普通文，談話体，講述体，演説体，言文一致体などに象徴される語彙の有無

6. 待遇表現

6-1 対者待遇度（丁寧度）：だ体・である体・です体など

6-2 素材待遇度（尊敬・謙讓度）：〈1〉素材待遇度（待遇レベル），〈2〉素材待遇の度数（尊敬・謙讓語数／総文節数）

4 行動要素＝人と人との関わりを統御する要素

- (1) 基底要素＝A 対面性（相手と向き合っている），B 対称性（送り手と受け手との間の対称性→2人以上が同時に同じ動作をしているか→会話時は「姿勢反響」によりきわめて似た動作が多少のタイム・ラグをともなって対称性が生まれやすい，→姿勢調整と関係），C 繰り返し性（同一身体表現を繰り返すか→1.一方的，2.相互的）
- (2) 調整要素＝A 対象の観察・認知（1.一方的観察，2.相互観察・挨拶，会話），B 対象との位置調整（空間移動→位置調整，1.一方的調整，2.相互調整），C 姿勢調整（1.一方的調整，2.相互調整）
- (3) 伝達表現要素＝A 大きめの身体表現（＝身振り→1.運動部位，2.動作），B 小さめの身体表現 1（＝しぐさ→1.運動部位，2.動作），C 小さめの身体表現 2（＝表情→1.運動部位，2.動き）
- (4) 行動効果＝A 主体の行動そのもの，B 主体の素振り（＝機械的な動作の連鎖としての「しぐさ・身ぶり」が基底要素と相まって素ぶりを形成，素ぶりは言語行動要素の 1 + 2

+4で構成される)

3 類型と行動分析A

日常にせよ作品内にせよ、言語行動は、支配コード+成立条件+言語要素+行動要素から成るが、それを完璧に収録した資料などはもちろん存在せず、口語文献資料には次のI型かII型が多く、III~V型のものも多くはなさそうだ(支配コードにまで言及したVI型の調査資料はいまのところ見つからない)。

I型=全部ないしは多くが言語要素の記述から成るもの

II型=全部ないしは多くが成立条件+言語要素の記述から成るもの

III型=全部ないしは多くが成立条件+行動要素の記述から成るもの

IV型=全部ないしは多くが言語要素+行動要素の記述から成るもの

V型=全部ないしは多くが成立条件+言語要素+行動要素の記述から成るもの

日常言語行動の中から、III型の分析例を示す。分析例Aは「寝る」素ぶり(=言語要素がゼロの行動)である。1の支配コードを加えて表記してみる。

1 支配コード=(1)文化コード+(5)日常コード+(9)その他のコード(服装コード, 普段着→パジャマ)

2 成立条件: 構成要素+条件

(1) 時=A特定時, B夜分に

(2) 所=D寝室で

(3) 行動の主体=A男, B若い, D家族, G長男

(4) 言語行動の相手=弟

(5) 行動の動機・目的・意図=A行動が意図的, Gまもなく床につくふりをする

(6) 言語行動の素材・話題=ゼロ

(7) 言語行動のジャンル=ゼロ

(8) 言語行動の機能=ゼロ

(9) 伝達内容=ゼロ

(10) 伝達規制=ゼロ

(11) 言語規範=ゼロ

(12) 言語表現の調子=ゼロ

(13) 心理場面=Cやや興奮

(14) 接触状況=ゼロ(対人接触なし)

(15) 媒体=ゼロ

- (16) 言語行動の結果・効果＝ゼロ
 - (17) 言語主体の評価＝ゼロ
 - (18) 言語主体の判断＝D明日は出発が早いから早く寝たほうがよい、Eでも楽しいからもう少し起きていたい、F寝るふりをしよう
 - (19) 言語習慣＝ゼロ
 - (20) 社会習慣＝C寝るときには寝巻きやパジャマに着替える
- 3 言語要素＝伝達言語ゼロ
- 4 行動要素
- (1) 基底要素
 - A 対面性＝ない
 - B 対称性＝ない
 - C 繰り返し性＝ない
 - (2) 調整要素
 - A 対象の観察・認知＝1.一方的観察、パジャマの認知
 - B 対象との位置調整＝1.一方的調整、対象の前まで来る
 - C 姿勢調整＝一方的調整
 - (3) 伝達表現要素
 - A 大きめの身体表現＝1.運動部位：体全体、2.動作（パジャマを着る）：上着を取る→上着を広げる→背中に運ぶ→袖に腕をとおす→ボタンをかける→スポンをのぼす→ズボンに足をとおす→ズボンの一端を腰の位置まで引き上げる
 - B 小さめの身体表現1＝非関与的
 - C 小さめの身体表現2＝もう寝るよという表情をする
 - (4) 行動効果
 - A 行動そのもの＝パジャマを着ながら弟の顔を見る
 - B 素振り＝もうすぐ寝る

4 言語行動分析B

行動主体の行動が言語要素を伴う場合は、どのようになるのであろうか。前節でみたVI型の分析対象として畑正憲の『ひと声』の一部を取り上げてみよう。引用部には言語行動一単位ごとにS1～S44の連番号を付したが、これは当然のことながら文法レベルの文とは単位の取り方が異なる。具体的には文章を言語行動単位に切る場合、句点を一応のメドとはするものの、会話文は身ぶりやしぐさが明示されていないかぎり、会話のカギカッコ内に複数の文があっても、一会話

文は一言語行動単位とした。緊密度の高い会話であっても、話し手が異なる場合は別々の言語行動単位とした。

S30の「息を一つはくと一分失われるようで、はきかけた息を思わずのみこむ。」を登場人物の「ゼロ言語」の言語行動とするか「意識」のサマリーとするか微妙であるが、この作品でのサマリイの「意識」は、

急がねばならぬ (S 4)。

早く (S15)。

一刻も早く (S16)。

気はあせるけれど、なにせ相手が重すぎる (S17)。

のように、地の文による文脈展開的かつ説明的性格が強く感じられる文に込められているのに対し、S30には「はきかけた息を思わずのみこむ。」という「行動要素」を有し「会話」部を加えようとするべきではない構文構造をもっているので登場人物全員の「ゼロ言語」の行動要素として扱った (S 6 はゼロ言語による直接言語表現行動, S11やS30はゼロ言語による間接言語表現行動, S 4 はサマリイの文とした)。

日が暮れてくる (S 1)。冷たい風が吹いてきた (S 2)。春とはいえ、うっかりしていると氷が張る寒さだ (S 3)。急がねばならぬ (S 4)。

I 君が泥に手をつっこみ、

「深いです。」 (S 5)

「……。」 (S 6)

「中に倒木があります。木が横に倒れこんで、それが馬の腹の下にあります。だから助かったんです。それでなければ、アオは沈んでしまってますよ。」 (S 7)

「ようし。」 (S 8)

「どうします。」 (S 9)

「ブルだ。ブルドーザを頼んで、沢に入ってもらおう。ブルなら、馬ぐらい引き上げられるだろう。」 (S10)

その提案が終わらぬうちに、純子君が車に飛び乗って母屋へ走った (S11)。除雪のブルを持つ会社に出動を依頼するためであった (S12)。

天の頂から日が暮れてきた (S13)。四周の林の中に夜がよどんでくる (S14)。早く (S15)。一刻も早く (S16)。

気があせるけれど、なにせ相手が重すぎる (S17)。もし底なし沼におちているのが道産馬^{とくさんこ}だったら、ロープをかけたり丸太を利用したりして、人の力で持ち上げられるだろう (S18)。だがアオは、世界最大種のペルシュロンだ (S19)。どんな怪力の持ち主を連れてきたって、沼から上げることはできまい (S20)。

道でしぎが鳴いている (S21)。この地方の人が、湿地しぎとよんでいる茶色の鳥だ (S22)。この鳥が道で鳴くと、日が暮れる (S23)。

「アオ、がんばれ。」 (S24)

「なんとかするからな。」

声をかけると (S25)、アオは目をつむった (S26)。その姿が、生きることをすでにあきらめているように見えた (S27)。

町のブルドーザーは、仕事に出ていて、到着するまでに時間がかかるという (S28)。

時間が飛ぶように過ぎていく (S29)。息を一つはくと一分失われるようで、はきかけた息を思わずのみこむ (S30)。

梢が黒くなった (S31)。湯沸の灯台の明りが届き始めた (S32)。

小さな声でランがあまえた (S33)。

沢伝いに、海のほうから寒さがいほのぼってきた (S34)。セーターの上にジャンパーを着ていても、時々身ぶるいをしなければならぬ (S35)。

K君がたまりかねたように、

「うちのトラクターで」 (S36)

「危ないな。よしたほうがいい。」 (S37)

「だけど……。」 (S38)

「もしひっくり返ってみろ、死ぬぞ。」 (S39)

「だけど。」 (S40)

「待とう、ブルを。」 (S41)

「だけど、このままだとアオが……。」 (S42)

流産の危険もあったし、下手をするとアオ自体の命も保証できない状態だった (S43)。

村の馬好きたちは、かつてこういう事故によって、何頭もの馬を殺している (S44)。

上記引用部での「登場人物」の言語行動に関して、次のような分析が可能である。

(1) 登場人物の言語行動

I君 = S7 会話。

S5 会話+に手を突っ込む。

S30はきかけた息を思わずのみこむ。

K君 = S38会話, S40会話, S42会話。

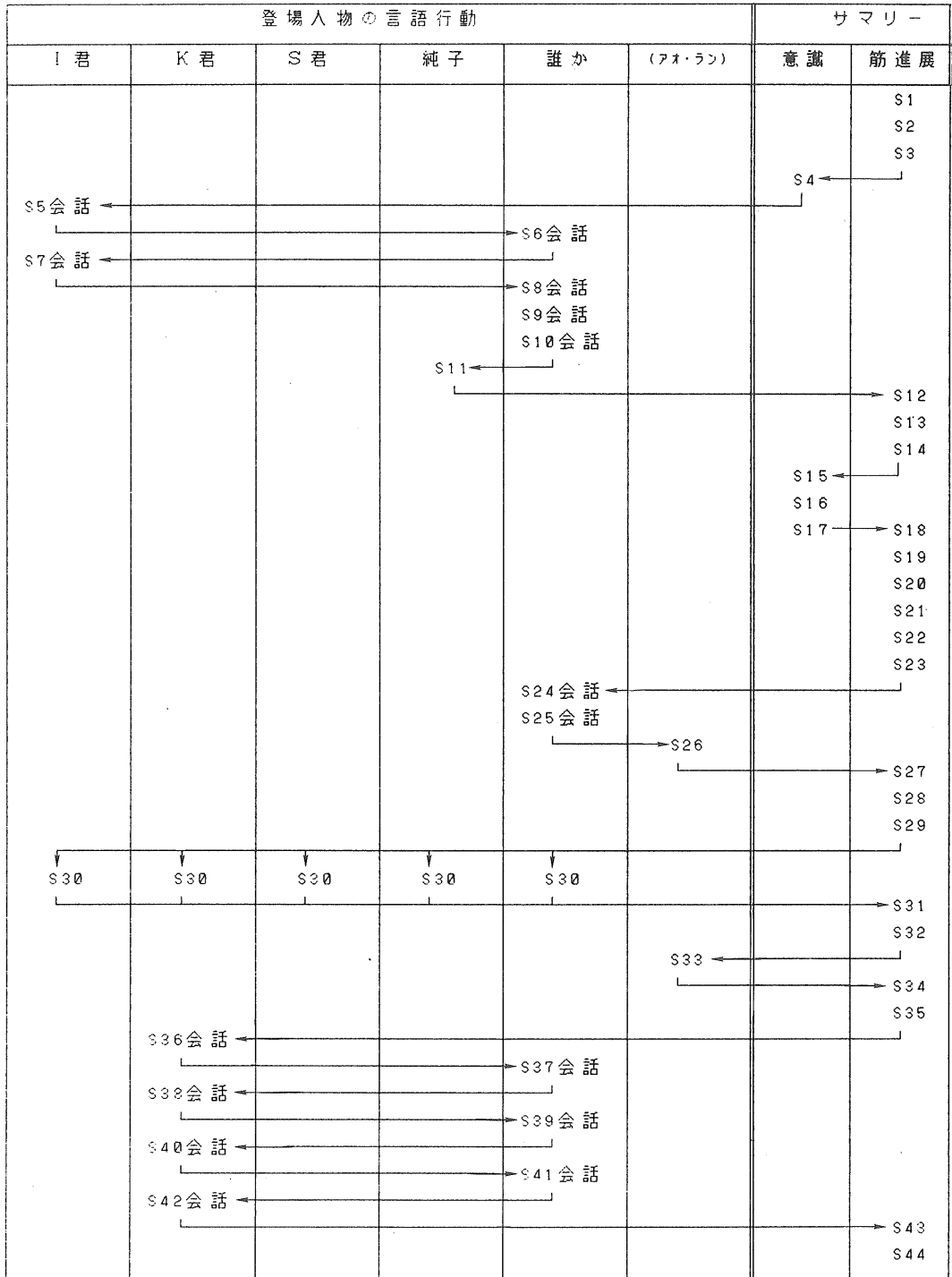
S36会話+たまりかねたように言う。

S30はきかけた息を思わずのみこむ。

S君 = S30はきかけた息を思わずのみこむ。

純子 = S11車に飛び乗って母屋へ走る。S30はきかけた息を思わずのみこむ。

図3 会話とサマリーの流れ



注 = 登場人物6人中、名前のついているのは4人。

S25	S30	S36	S37	S38	S39	S40	S41	S42
	暗くなる							
誰か馬の アオ 励まし	みんな	K君 誰か 決断仰	誰か K君 決断	K君 誰か 決断仰	誰か K君 決断	K君 誰か 決断仰	誰か K君 決断	K君 誰か 抵抗
伝達 励まし		提案 トラクター	拒否	固執	拒否	再固執	提案 フル	強固執 トラクター
		たまりかねて	心配して	たまりかねて	心配して	たまりかねて	心配して	たまりかねて
アオ弱る		アオ危険	人危険	アオ危険	人危険	アオ危険	人危険	アオ危険
		会話体 情感的						
命令形 常体	未完了 形						未完了 志向形	
	息をのむ							

注: φはゼロ語彙の「……。」を表す。

誰か＝S 8～S 10会話，S 37会話，S 39会話，S 41会話。

S 24会話＋アオに声をかける。

S 25会話＋アオに声をかける。

S 30はきかけた息を思わずのみこむ。

(2) 登場人物のゼロ言語行動

誰か＝S 6「……。」

(3) 意識のサマリー＝S 4，S 15～S 17

(4) 説明のサマリー＝S 1～S 3，S 12～S 14，S 18～S 23，S 27～S 29，S 31，S 32，S 34，S 35，S 43，S 44

上記から，作品の引用部は説明中心のサマリーを軸に展開されており，言語行動は会話という言語要素が大部分を占める「説明」＋「会話」型の類型に属することが読み取れる。作品表面に表れた明示的行動要素は，44単位中わずかに，

I 君がに手をつっこみ，「深いです。」(S 5)

その提案が終わらぬうちに，純子君が車に飛び乗って母屋へ走った(S 11)。

という2単位にすぎない。しかも，行動内容(しぐさ・行動)がきわめて単純である。これは，この作品全体の言語行動の特徴でもある。

5 言語行動の流れ

作品中の人物の言語行動の一つ一つは相互に関連性をもちながら，結末部へ向かって動いていく。筋の展開にしたがって言語行動の流れができていくというわけである。『ひと声』の場合は，どのように流れたか。

S 1～S 44の会話とサマリーの流れは，図3のとおりである(アオとランは「人物」ではないが，文接続の「流れ」を切断しないという目的のため，便宜的に表示した)。図3では，「登場人物の言語行動」のうち「S 5会話」「S 7会話」のように文番号に「会話」をプラスして表示したものは「会話をともなう言語行動」を，「S 11」のように文番号だけで「会話のついていないものは「会話をともなわない行動」を表す。また，S 6は第一節で述べた理由により「ゼロ言語達表現行動」としての会話文とする。

第2節で提案した言語行動要素は，小説などの作品の中では，どのような要素選択と要素接続を見せるのであろうか。前出『ひと声』の中の「人物」の言語行動について要素の接続状況を調べてみた。

図4に主な言語行動要素の流れを示す(詳細な表示は煩瑣になるため音韻，文法，基層的文体素，表現的文体素の一部などは表示を省略した)。表中の網かけ状の部分，そこが前のセンテ

スの要素を引き継いでいることを示すものとする。

図4から、『ひと声』では、(1)「支配コード」「成立条件」「基層的文体素」の同一要素接続が顕著であり、(2)行動・身振り・しぐさといった行動要素がきわめて少ないことが分かる。おそらく前者は、ある程度以上の長さをもち物語性や論理性の高い作品・文章に観察される一般的な特徴であろう。

〈注〉

- (1) 「共同体」は作者や登場人物との関係によって関わり方が異なってくるので、図1に全てのケースを盛り込むことはできない。
- (2) 『ひと声』のS5やS6などの文は発話がかギカッコに入れられ登場人物の視点に立つての言語行動として記述されているので直接言語表現行動、S11の純子の行動は作者による説明的な行動の色彩が強いので間接言語表現行動として扱ってみた。今後の検討を要する。
- (3) 拙論「言語行動とその構成要素」(『城西文学』第13号、城西大学女子短期大学部文学会)、「言語行動と資料研究」(『国文学解釈と鑑賞』57巻7号、至文堂)
- (4) 杉戸清樹先生の「待遇表現としての言語行動——「注釈」という視点——」(『本語学』二巻7号)を参考にさせていただいた。
- (5) 「文末表記」を中心に、本稿の文体要素の構成に関しては、杉山康彦先生の「私の文体論」(『日本語学』四巻2号)より多くの学恩を受けた。心より感謝申し上げたい。
- (6) 上記(3)の「言語行動と資料研究」に若干の説明がある。
- (7) このような扱いが最適かどうかは今後の課題としたい。
- (8) 作品の引用部分の少し前に、アオを助けに駆けつけた人物が6人いて、その中にS君も出てくるので、図3は登場人物にS君を含めて表示した。